

2006年(ワ)第6484号

謝罪及び損害賠償請求事件

原告 王 子雄 外39名

被告 日 本 国

意 見 陳 述 書

2007年1月24日

東京地方裁判所民事第13部 御中

中華人民共和国四川省樂山市嘉定中路73号

重慶大爆撃被害対日賠償請求訴訟原告 趙 樹信

- 1 私は趙樹信と申します。今年70歳になります。日本軍国主義は、中国侵略戦争の期間に非道にも樂山を爆撃し、私の父趙子元を殺し、我が家を焼き払いました。私は、兄弟の趙樹倫、趙中和、趙淑芬、趙淑華とともに、日本の裁判所の法廷で、日本軍の天にも届く残虐な犯罪を告発します。

樂山は、旧名は嘉洲で、世界文化自然遺産である峨眉山・樂山大仏の所在地です。大自然の恵みが樂山の綺麗な山水をつくりあげました。岷江、青衣江と大渡河が市区の中心で合流し、山水は麗しく、気候もよく、人々は豊かな生活を送っていました。この樂山は西南の大後方【奥地。抗日戦争期の国民党支配下の西南・西北地区をいう】で、何ら防備の無い街であったのに、残忍非道な日本侵略軍は、この小さな街すら見逃さず、大量の爆弾を投下しました。こうして樂山城内の三分の一の家屋が破壊されました。

1939年8月19日、日本軍機は、36機で樂山を繰り返し爆撃し、樂

山の民衆に巨大な災難と苦痛をもたらしました。爆撃によって城内の12の通りが全壊し、死者は千人を超え、万にものぼる人が帰るべきところを失い、故郷を離れざるを得なくなりました。家屋の破壊は数え切れません。

戦争が終って67年経ちましたが、当時のことを思い出しますと、爆撃で破壊された樂山の悲惨な情景が今でもありありと浮かび上がってきます。

2 1939年、私の一家は、父趙子元（40才）、祖母趙李氏（61才）、母趙陳氏（38才）、長兄の趙中和（13才）、長姉の趙淑芳（11才）、次兄の趙樹仲（9才）、二番目の姉の趙淑芬（7才）、一番小さい姉の趙淑華（5才）と私（2才9ヶ月）、弟の趙樹倫（1才6ヶ月）のあわせて10人家族でした。樂山市較場坝街28号に、家、店舗と倉庫を一体にした800平方メートルの屋敷に住んでいました。「天和長」という商店を経営し、砂糖や酒や煙草や食用油などいろいろな特産物を販売しており、4人の従業員と賄いの女性を雇い、商売は繁盛していました。

3 1939年8月19日、正午ごろ、せわしげな警報が鳴り続けていました。そのとき、ほぼ毎日警報が鳴るので、気にかけなくってしまった人すらいました。老人と子供は人の助けで城外或いは河の対岸に渡って避難をしましたが、私の父趙子元と奉公人の劉坤は店舗に残って留守番をしていました。

私の母（趙陳氏、纏足）は、まだ産着を着ている弟を背負い、祖母（纏足）は姉や、兄に支えられ、私は奉公人に背負われて、空襲警報がだされるといつもきまったように河を渡るため肖公嘴の渡し口の方へ避難しました。警報で避難してきた人でごったがえしていました。河岸に着いてすぐ、日本軍爆撃機が編隊を組んで上流に向かって飛んできて、爆弾を投下し、さらに止むことなく機銃を掃射しました。瞬く間に、樂山の全部が濃煙に包まれ、火柱があがり、爆発音、家屋の倒れる音が混ざり合って、人々の泣きわめき

叫ぶ声をかき消すほどでした。私は地面に臥せたまま、恐ろしくて声も出せず、頭を上げることもできませんでした。

警報が解除された後、家にもどって見ると、いたるところ崩れた垣や壁で、死体も至る所に散乱し、血が一面に流れていた。ある死体は腕と足がなくなり、ある死体は腕があるが足がない、またある死体は内臓が外に飛び出していました。負傷者も数えきれないほど多く、苦しんで呻吟し、むごたらしくて見るに忍びがたいものでした。

私たちが家に戻るときに、家から100メートル離れた肖公嘴方面への路上で、父は頭を銃で撃たれて倒れ死んでいました。頭に機銃掃射に浴びていましたが、遺体の形は整っていて、父とすぐに分かりました。当時、父はまだ40歳でした。長兄が急いで駆け寄り、着ていた服を脱いで、父の遺体をくるみました。振り返って店舗を見ると、爆撃を受け火に呑み込まれており、風にあおられ、数十罐の油（約1.5トン）や五甕の酒（約2.5トン）が火の海に呑まれ、ほかの商品とともに灰燼に帰しました。数十万大洋（旧時の1元銀貨）の経済損失をこうむりました。

家族の全員の胸の中には、日本軍に対する激しい怒りがこみ上げました。特に母は「日本はなぜ私たちを爆撃したの。上には年寄りがいて下には幼子がいる。これからどうすればいいのか？」と泣き叫び続け、何回も気を失いました。父のほか、従業員1人（劉坤、20歳）と賄いの女性（趙李氏、35歳）も爆撃で殺されました。

- 4 私たちは、父の遺体を楽山県安谷郷劉河村の実家の野菜畑に運び簡略に埋葬しました。災禍が突然襲いかかり、私たち三世代の安寧な生活は打ち壊され、家族の柱である父親を失って、住むところもなく、生活の糧をえる道もなくなり家族9人は窮地に陥りました。呼べど叫べど答えてくれるものはなく、生活の苦難を嘗め尽くし、不遇な一生を送らざるをえませんでした。

子供もいるし、年寄りもいます。母はなんとか生き延びるために、私たち家族全員を連れて、安谷郷劉河村の実家に戻って、桑を植え蚕を飼うことにしました。朝ご飯があっても晩ご飯が無いことはしょっちゅうで、本当に一日が一年のように長くてつらいと感じていました。

私は、母の実家に住むようになってから、地主の牛飼いの仕事をしました。雇い主は少しでも気に入らないことがあると私を殴ったり、罵ったりしました。ある時には、犬をけしかけられ、ふくらはぎを噛まれ、家に駆け戻りました。家族は私の血だらけの足をみて泣くしかありませんでした。今だに、犬にかまれた傷跡が残っています。

家が貧しかったので9歳になってようやく小学校に入りました。しかし、16歳の中学のとき、生活が苦しく、中学を卒業できないまま退学しました。2人の姉は学校に通うお金がなかったので、今でも文字を読めないし書けません。未亡人の母はどうしても家計維持することができなくなって14歳の一番小さい姉の趙淑華を童養媳【トンヤンシー:将来息子の嫁にするために子供のときから引き取られた女の子。息子が成人するまでは下女として働かせる】にするしかありませんでした。

私の二番目の兄の趙樹仲は8・19の爆撃後、おびえて精神を病みました。当時、家は貧しくて、兄の病気を治すお金さえなかったのです。そのため、兄の病状は日増しに悪化してしまっって一生結婚できず、31歳で亡くなり、まさしく悲劇でした。

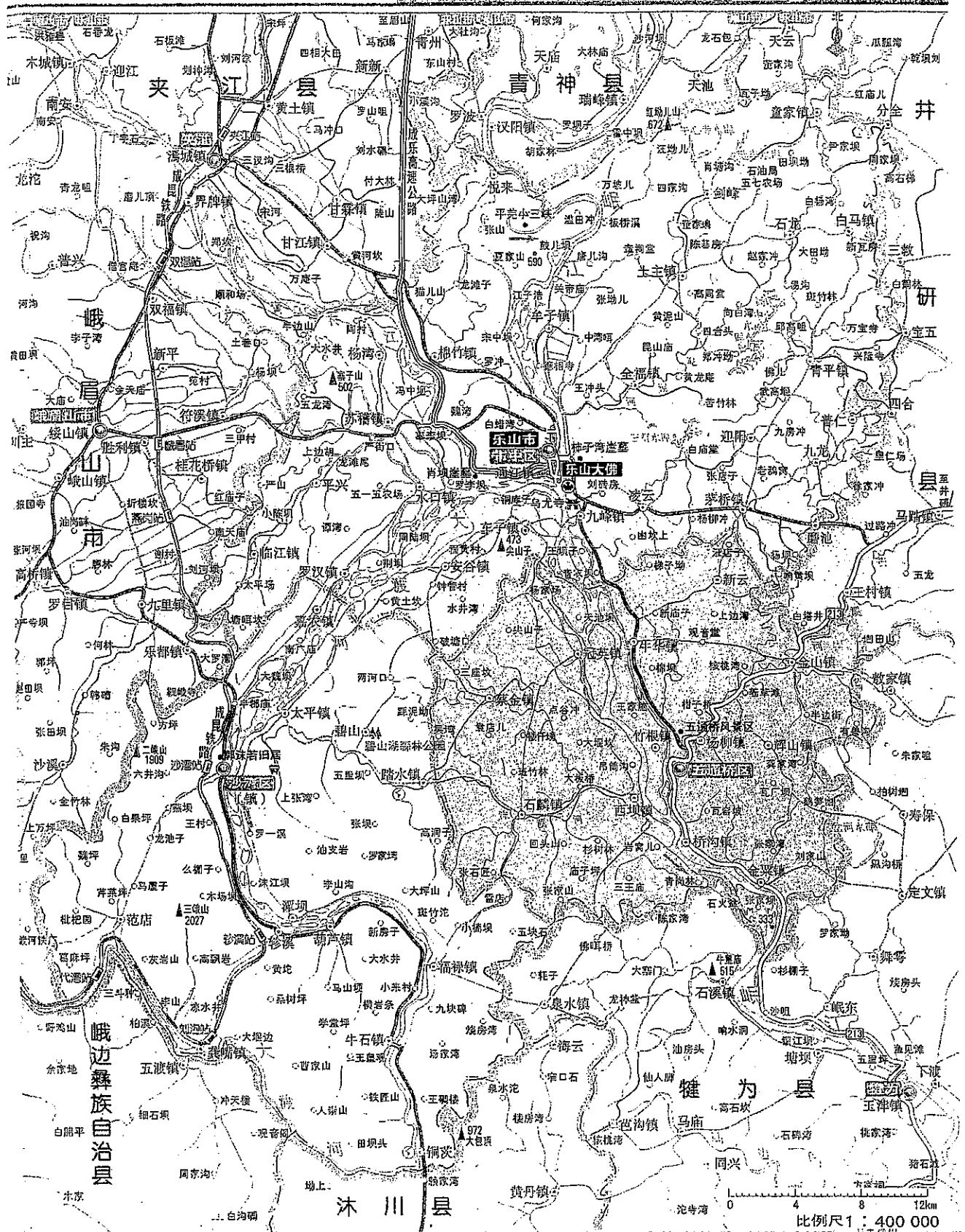
これらのすべてが、日本軍国主義が樂山を爆撃し、罪なき人々を虐殺したことから引き起こされたのです。

- 5 尊敬する裁判官、日本軍帝国主義者の天にも届くという罪は、書き尽くせません。日本政府は、歴史を正視し、歴史を反省し、歴史を鑑として、未来に向かい、二度と再び軍国主義の道を歩むことのないよう、頭を下げて謝罪

すべきです。

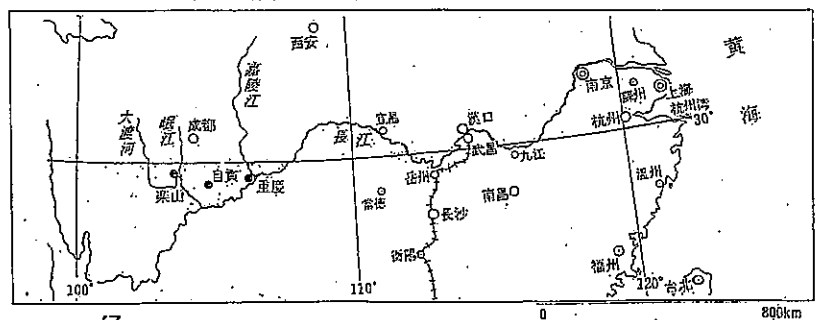
あの世にいる家族を慰めるために、裁判所が、私たち一家の生命と財産を奪われた被害について日本政府に賠償を命じるように強く要求します。

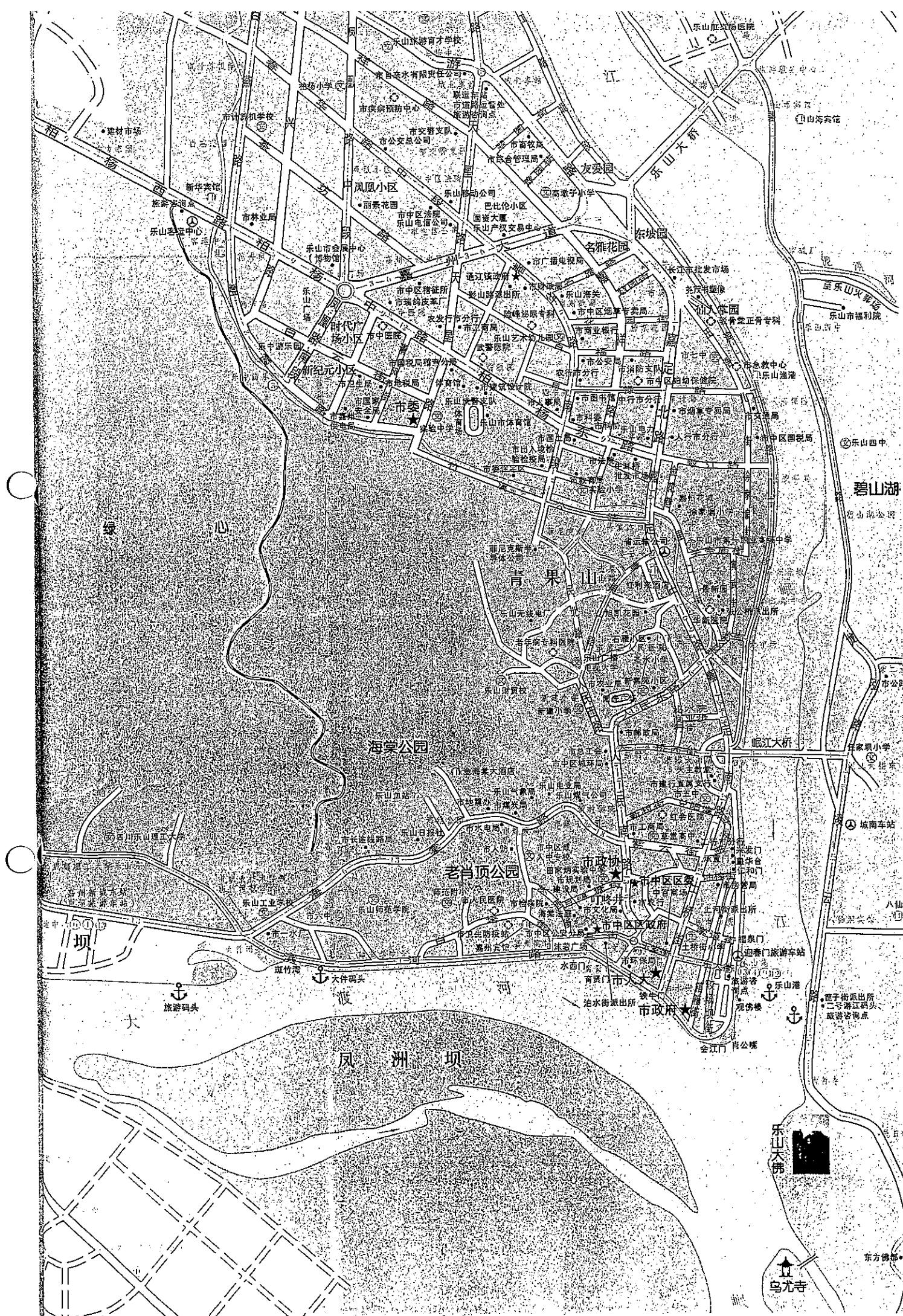
以上



出典：『四川省地图册』（成都地图出版社、2005年）

重慶大爆撃関連地図（●印は本訴訟の爆撃被害地）





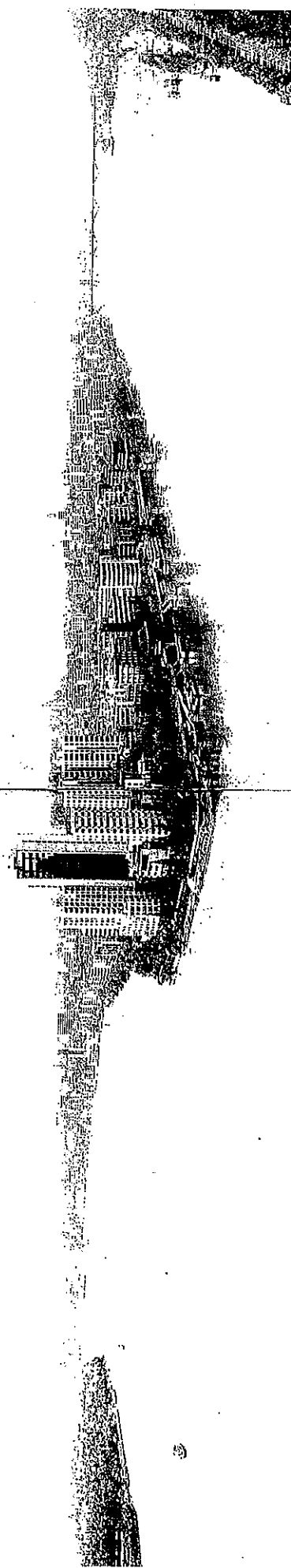
手山六梯



燕山市景

“天晴见峨眉，如向波上浮。”（唐·岑参）

乐山大仏から対岸の樂山市街を隔む。
右手の川が岷江、左手の川が大渡河。



左手の雲の中に見えるのが峨眉山。

市中心城区远眺